



H29年度

畳工事一式、襖・障子・網戸張替、
和小物販売

- 代表者名 代表 塩澤 政博
- 設立年月日 1962年(昭和37年)
- 所在地 〒409-3864
山梨県中巨摩郡昭和町押越920-2
- TEL 055-275-3681
- FAX 055-275-7576
- E-Mail showa-no-sashi@lemon.plala.or.jp
- URL http://www.yamanashi-machitsukuri.jp/tatami-shiozawa/
- 業 種 製造業
- 従業員数 2人

インタビュー



代表 塩澤 政博

テーマ

畳殺菌乾燥機並びに全自動反転式返縫機の導入による生活環境改善提案
及び1dayサービスの実現

地球温暖化や集中豪雨など近年高温多湿の環境が進み、それに伴う生活環境における畳のダニやカビの発生が多くなってきている。畳の優れた調湿機能を発揮させ、快適で衛生的な生活環境を実現するための「畳殺菌乾燥サービス」を内製化により提供し、併せて即時に納品を実行するために返縫い工程の自動化による工程削減を図った。

近年、建てられる日本家屋に畳のある和室は一部屋くらいか、畳の部屋がないことも珍しくなくなった。時代の推移によって日本中の畳数は低下しつつあり、原材料であるい草生産農家の減少、安価な外国産畳表の普及、さらに若手後継者不足による畳店の減少も含め、業界を取り巻く環境は厳しい状況にある。

また地球温暖化による日本の高温多湿化とそれに伴うダニやカビ等の繁殖によって子供たちのアレルギー症状の発生・悪化も深刻化している。山々に囲まれた盆地である本県は、夏は蒸し暑く、冬は非常に厳しい寒さとなる気候であり、高温多湿の受難地の一つといえるだろう。

このような問題に対し、生活の中で今なお必需品である畳において、安心で衛生的な畳の需要・要求が高まっている。健康で快適な生活環境こそ常に最大の求められる点である。

日常的に慣れ親しんでいる畳での生活で、畳表替えの注文時に少しでも早く納入してほしいというニーズは根強い。お盆前や正月前など繁忙期では注文が重なり、それにより納期が遅れお客様を待たせる場合も出てくる。それらを少しでも改善するために製造工程を見直して短期間で納品する事が、お客様のニーズに応えることになる。

平均的な畳の依頼枚数である8畳の畳殺菌



畳殺菌乾燥機

乾燥サービスと畳表の張替を合わせると、どうしても2日工程となり、お客様から引き上げた畳を1日お預かりすることになってしまう。当店では、乾燥機を備えていないため、お預かりした畳を他店の乾燥機を使用して乾燥させていた。そのなかで課題となるのは、外注先との時間調整。乾燥を外注する業者も通常業務を抱えながら、新たに仕事を引き受けるため、こちらの希望通りに乾燥業務を受け入れていただけないこともしばしばあり、仕事の段取りが難しくなるケースが多く発生する。また、乾燥を依頼する先への畳の搬入手段も車であることから、道路の混雑状況により、予定時間に依頼先へ納めることができないこともある。そこで自社で「畳殺菌乾燥機」を用意すること。スペースの問題は大きいですが、時間を最も有効に使うことが出来るようになった。

さらに、当店の現状の作業工程では、畳のヘリを縫い付ける作業（平刺し）と畳のヘリを起こして縫い付ける作業（返し縫い）を1台の機械でこなしているため、作業におけるムダ時間が発生し、効率が悪い。

「全自動反転返縫機」の導入によって、さらに時短が可能になった。

畳離れの現状の中で、顧客ニーズに添うため『1day サービス』を掲げた。着実に成果が現われている。



全自動反転返縫機

畳刺(さし)としての誇り。そして畳ドクター山梨県内認定第1号へと技能を極める



多入店
いり口
の作業
が見え
るよう
に
開けて
おくこ
とに

塩澤さんの写真を撮った。その腕組みした胸に記された文字『畳刺』。「さし」と読む。畳職人の仲間内で「畳刺し」のことを粋にこう呼ぶのだ。

「こんなに小さい頃から…」と、膝に手を当てて「そう、小学生くらいの頃から、もうずっと畳刺・畳職人になると決めてました。」と塩澤さんは語る。

父の背を見て、迷いもなくこの道へと進んだ。

それはまず身内ではない人に弟子入りすることから始まった。他県の親方のもとで修業を積む。3年の修業とお礼奉公も含め、ござ縫いから徹底的に技術を習得したのだ。

「最近では専門学校があって、技術を学びま



最終整えるのは職人の腕。



全自動反転返縫機
このように自動でくると
反転する便利もの

すけど。本物の技術の伝承を若い人たちに伝えたいという心意気で仕込んでくれた、とても素晴らしい親方です。」

それは畳業界の今後を見据え、減りつつある畳のある家や、畳の文化そのものが消えそうな日々の現実、そして伝統を受け継ぐほんものの職人も次々と減っている現状。これからの畳業界を考えた親方は若い弟子を仕込むという苦勞の多い対策を始めたのだろう。塩澤さんは初めてとる弟子2人のうちのひとりだったのだ。

地元で愛される畳職人として精進し、全国技能グランプリ畳製作第3位に入賞、また畳ドクターとして山梨県第1号に認定された。



畳の横からみえる縫いの目

愛すべき伝統文化・畳の継承と存続は、人と繋がり、広めて、ひたすら前進すること



畳をつかった小物。イベントなどで人気の商品

塩澤さんは、お子さんのスポーツ少年団（バスケット）の取りまとめも熱心に取り組む。また、消防団での活動も意欲的だ。

「スポーツはもちろんです、消防団も大会があって、ここでも必ず好成績を獲りたいんです。それも皆で技を磨く事ですから。」

競うこと、精進すること、力を合わせる。これらはまさに職人氣質の現れのように思う。

塩沢畳店では、主に個人宅を顧客としている。畳数の減っている現状で厳しいところではあるが、まず自分の気質に合う多くの人と出会い、力を合わせて活動することで、多くのつながりを得て信頼を勝ち取り、さらに仕事にも繋がっていく。

「店の入り口は出来るだけ開けておきます。中で

仕事をしている姿を見ていただくことで、知っていただくこと、興味を持っていただくことができるかな、と思って。」

実はかつて塩澤さんの祖父が父に「畳仕事なら決してなくなる仕事だから。」とこの道がスタートしたのだという。昔は各々の家庭で畳干しという風習（年に一度畳を日光に当てながら乾燥させ、湿気を取り虫干しさせる）が存在した。畳の管理や掃除のやり方マニュアルが、各家庭にあったということだ。今や出入りの畳屋さんがいる時代ではなくなった。愛すべき安らぎ空間である畳の間、この良さを知らせ、きちんと管理・手入れすることも伝える責務を感じて、塩澤さんは奮闘している。

毎年、地元小学校の職場見学を受け入れており「畳はおばあちゃんの家にはかない子」も多いとか。ものづくり授業の講師や各種イベントなどで手縫い実演を行ったり、また畳を使った和小物やサンダル、コップ敷き、畳ヘリのバッグなど用意して販売するなど、各種啓蒙活動も次々行う。

畳を知らない子供たちも、室内で遊ぶということ必ず畳の間に集まってしまうという。あの肌触りからくる安らぎ感。これこそ伝え、ひろげ、味わってほしい日本文化の神髄のひとつ、畳文化なのだろう。祖父が予言したように、なくなる職業として、さらに極めていってほしい。